

▶ 米線のたのしみ

2005～06年にかけての正月旅行は雲南省南部だった。同行のメンバー7人は、ほとんどが会社勤めなので、長期休暇がとりにくいという悩みがあったが、烏里烏沙さん(チベット高原初等教育・建設基金会理事長)に旅程の組み立てなどご尽力、同行いただき、楽しい旅ができた。

今回の目的は、壮大な「棚田」見学と、華麗な民族衣装の「花腰傣族」訪問だった。

中国の棚田はこのごろテレビや、雑誌の写真で見かけるので、もはや「秘境」ではない。私は棚田も観たいが、棚田を含む雲南省南部の風土も観たかったのでこの小旅行は、ちょうどよい機会であった。

以前ベトナムのハノイへ観光で行ったときに大河「紅河」を観た。レンガ色の水がハノイ近郊の広大な水田を潤している。この河の源流は中国雲南省だ。雲南省南部のどんな谷を流れるのか、紅色の水はどうして? などと、いろいろ興味がわいたが、今回観られて嬉しい。

雲南省旅行の楽しみは、米線という、ビーフンのうどんが食べられることだ。のどごし、味とも良く、ツルツルと食べられる。茹であがった米線に白いスープをかけ、挽肉を辛く炒めたものや、現地独特の香辛料、香菜などをのせて食べる。自分で辛みや具を調整できるので「辛み初級」の私でも安心だ。店によってこの過程の段取りが客の自由にならない場合もあるが、そのときはそれでよい。当然だが店によって少しずつ味が違い、それも楽しい。難をいえば「味の素」をひかえてほしい。

▶ バスに揺られて

12月31日9時、昆明の金泉大酒店を出発。この日の泊まりは棚田の見学の足場となる街「元陽」だ。「紅河哈尼族彝族自治州」にあり昆明から南方約300キロにある街だ。提携先の「雲南熊猫国際旅行社」から派遣された、若い(30歳代か)丁さんと、バスのオーナーで運転手の小柄な宗さん、が旅の道連れだ。バスは19人乗り、中国「金竜」社製、まあまあこざれいであるが南国仕様で、暖房はない。

昆明の街は日本の街に比べれば路が広くゆったりしているのだが、急激な車社会に追いつかず、高速道路に乗るまでが大渋滞で無駄な時間をとられた。車窓から観察すると、幹線道路に歩行者用の信号などあまりないので、年寄りなど普段の生活に不便であろう。荷馬車が立派に現役で、長いまつげの馬車ウマが首を振り振り駈ける姿を観ると、「がんばれや」と応援したくなる。ウマは、排ガスをあびながら車の間を消え去った。

高速道路に入ると葉物の畑や、野菜を作るビニールハウスなどが続き、車窓がみずみずしい。咲き始めた菜の花畑もある。バスは高みを走るので見晴らしがよい。しばらく進むと、右手に空を写して青い湖「滇池(昆明湖)」が遠望できた。湖畔に断崖を架けて盛り上がる名勝「西山」が青くかすみ景色は箱庭のように美しい。滇池が汚染された湖として名高くて、遠目には絵のよう

である。

高速道路でも、「高速」で走れない車もある。積載オーバーと思われる大きなトラックで、喘息持ち肥満のオバサンのように、よたよたと走る。普段でも煙幕のような黒煙を吐くが、登り勾配では息切れして、路肩に止まっているのをちょいちょい観る。これらの車を追い抜くとき、高速道路は追い越し車線があるので、対向車の心配が不要なのがよい。雲南省南部は広い高原状の台地で、そこをたくさんの河が谷を作った。道路はその谷を幾つも横切るため、長い坂が多い。休み休みでないと走れないトラックが多いようだ。

高速を下りて「通海」へ行く途中で、猛烈な交通渋滞に遭遇した。あとで通り抜けるときに観たのは、交差点の信号が点いていなかった…と、交差点の中でトラックと乗用車の接触事故があったこと、であるが渋滞中のでたらめぶりは傍観者としては面白い。片側1車線で流れるべき道路が、運転者の自己都合で自由対面道路になってしまった。道路に沿って排ガス、ホコリが巻上がっている。われわれのバスは、小刻みに動くうちに、巨大なトラックに左右を挟まれ、身動きが取れなくなった、困ったなあ。乗っているバスは、もつれた車ダングの一台に加わり、じっと止まったまま渋滞解消を待つ。

かなり時間が経過してから、嬉しや、交差点に交通警察官が3人現れる。続いて職務を遂行。猛獣をしつける調教師のように腕を振って右、左の車に指図する。するとどうだ、固まった氷のブロックをお湯で溶かすような具合に、車のもつれを次々とほどこいた。なーんだ、やればできるのじゃないか。

昼食の後、またバスに揺られる。道路は山越えの地形になり、別の谷に入った。まわりの景観は、大陸的でゆったりしている。1月といえども低緯度、日差しは暖かい。土地はラテライトと呼ぶレンガ色の土壌が基調で、痩せた土地だ。植生は貧弱で、天然林はほとんどなく山野はすべて人の手が入っているように観えた。

▶ 土砂崩れ

峠を越えてから、小さな谷に沿って下った。そして眼下に大きな河、紅河(地物名は元江)に突き当たり、河岸の縁に出る。それから左岸の谷筋を下流に向かって走る。紅河の水は



紅河(元江)と崩れた道路。すぐ下流にダムがあり流れが止まっている。

名前のようにレンガ色である。

突然、路面の舗装がなくなってガタガタになり、土砂崩れの現場に出会った。バスは止まった。行く手の法面が連続的に崩れて陥没し、通行不能になっていた。すぐ先で道は二股になり、一方が土砂崩れ現場へ、もう一方は復旧用仮設道路に行く。復旧仮設道路は、崩れた本道路と平行した上方斜面を切り開いて敷設してあった。仮設道路の進捗ぶりからすると、土砂崩れ発生はかなり以前と推測するが、関係する接続地点に「道路情報」というものは出さない。崩れた現場にきてから初めて「困った」ことが分かる仕組みになってのは本当に困るね。

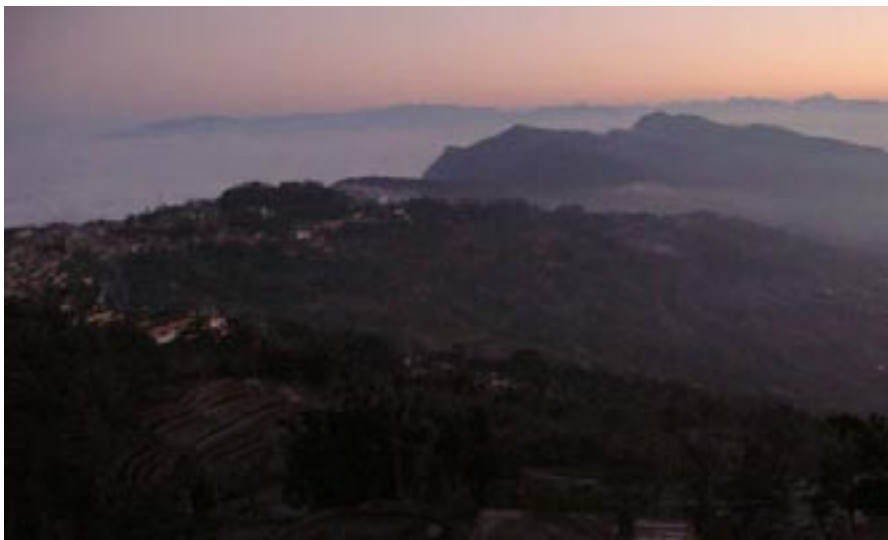
ここまで来ると、もうすぐ今日の宿「元陽」はすぐだ。土砂崩れ現場を避けて、別の経路をとるのは現実的ではない。丁さんが車を降りて土木工事中の作業員に様子を訊きにいった。彼がバスに戻ると、進んでも良いだろうということで、おそろおそろ出発。道幅はある程度広いのだが、ブルドーザーで削り取ったままといった有様。大石がごろごろして、車が通った痕跡のあるわだち以外は通れない。そして、そこはなぜか道路端の崖際ばかりなのだ。対向車よ来ないでくれー。最減速して慎重に走行したが、ときおり床下になにやらゴトゴト当たる音がして、気持ちがわるい。碎石を乗り越えるときに大きく横揺れすると、弾みで路面から飛び出して紅河に転落するかと思った。

路幅に余裕のあるところで、荷台のベンチに子供らを満載した小型トラックとすれ違った。学校帰りのスクールトラック(バス)のようだ。子どもらは怖がっている様子はなく、笑顔で手を振る子もいる。彼らにとっては日常的な通学路なのだ。

やっと悪路を抜け出してから、紅河に架かる橋を渡り、対岸に出て右折、元陽の街に入った。商店が街道沿いに続き、間もなくホテルに着くぞと思った。しかしバスは街を行き過ぎてしまった。



傾斜地に建つ元陽「新街鎮」のたたずまい。



元陽「新街鎮」のあけぼの、長大な尾根の上に街(写真左側)がある。

街はずれの修理工場で停車し、バッテリーを直すことになった。悪路での振動のせい、配線に不具合ができたようだ。全員下車して、足腰を伸ばしたりする。近所に気の利いた商店でもあれば、退屈しないのだが、殺風景な町工場ばかり並ぶ界隈で残念。修理に1時間ほどかかった。

▶ホテルのある「新街鎮」へ

バッテリーを直して出発。すでに夕闇がせまってきたが、まだホテルに着かない。元陽の街からホテルまではごく近いのかと思ったら、とんでもない。ホテルの位置は、元陽県の「新街鎮」というところで、元陽とは別の街だった。すでに暗くなった山路をエンジン音やかましく、蛇行して高度を上げる。次のカーブを曲がればホテルのある街、「新街鎮」の明かりが見えると期待するが、幾度も期待はずれた。しかし、ついに行く手の闇上方に、小さな明かりの点がたくさん現れた。日本の街のように、ネオンやけばけばしい色彩はない。小さくひかえめの、暖かい街明かりだった。7時45分ホテルに到着。

荷物を部屋に置くと、すぐに夕食で、近くの郷土料理店へ歩いて行く。美人女将がとり仕切る、ウリさんのおなじみらしい店にはいり、腹を満たしてくつろぐ。この日はバスに乗り疲れ、ホテルへ戻ると、すぐに寝てしまった。

明けて31日、6時30分。市中見回りの散歩にでた。まだ暗いが、街は活動を始めていて行き交う人々がいる。网吧(インターネットカフェ)から出た、男女の若者がそろそろ行き過ぎる。終夜営業の終了か。雲南の岳都も、インターネットの波にさらされている。

7時をすぎるとようやく明るくなった。前夜は暗くて分らなかったが、街並みは長大な尾根筋の中ほどに、こびりつき、山肌にてきたおどきみだ。街の展望台からの眺望は見事だ。遠くの山々は朝日に洗われ、眼下は雲海が蠕動して、海に突き出た半島からの眺めようだ。あとで訊いたところによると、街の標高は約2000mもあるそう。

▶続く

▶「銘水」あり

「新街鎮」の商店街は、みな坂道に沿って並んでいる。アニメ映画、「千と千尋の神隠し」に描かれた温泉町に雰囲気が似ていると思った。家並みの一角でポンカンほかの果物を売る民族衣装のおばさん露天商が並び、朝からにぎわっていた。

路端に小さなあづま屋があり、そこで小鳥の「鳴き合わせ」をやっていた。あづま屋の梁に、鳥かごを一列に幾つか下げて、鳴かせている。それを飼い主の老人らが満足げに見上げていた。優雅なこの遊びは話には聞いていたが、実物を観たのは初めてだった。都会の趣味かと思っていたがそうでもないようだ。緑色の布きれで覆ったこぎれいな鳥かごが常番のようだ。1人で必ず2つの鳥かごを大事そうに持ち歩いている。同行のAさんによると、小鳥が2羽でいると、縄張り意識を呼び起こし、よく鳴くそうだ。

大きめの空ペットボトルを何個か提げて道行くおばさんがいた。近くに「銘水」が湧出するのであるか？。興味があったのであとをつけた。おばさんは横道に入ると、民家の塀に挟まれた狭い石段を降りていった。階段の先は家並みが途切れ、傾斜した畑が谷へ下っている。家並みと畑の境には石垣があり、「銘水」は石垣の下部に差し込んだパイプから流れていた。まわりに、水をくみに来た人々が数人、順番を待ちながら歓談していた。こんな山の中腹に湧水が湧くのは不思議だが、乾季の冬でも、水が豊富な地方なのであろう。元陽の街はどこから都市用水をまかなっているのか、地形からは水が有りそうもないのだが。帰国して調べたら東京の年間降水量が1460mm、元陽はかなり多く1600～3000mm^注)と、分かった。そうでないと、あの気の遠くなるような棚田への給配水ができない。

ホテル戻って、朝食の米線^{ミーシェン}を味わう。ここの米線はことにうまく、歯触り喉ごしとも大変よろしい。歯切れの良さは新潟地方の「へぎそば」そっくりだと思い当たった。乾麺ではなく生麺で、これがうまさの要因の一つであろう。

▶「棚田」見物に出発

今日の予定は、バスで棚田めぐり。中国語で棚田は「梯田」夕



哈尼族「愛春村」のたたずまい。素焼きレンガにスレートが標準的な民家。背後の山は「白岩子山(2939m)」、元陽県最高峰。

ンボのハシゴというわけだ。「新街鎮」で宿泊したホテルの名前も「雲梯大酒店」で、棚田の観光客を大いに当てにしているようだ。

10時にホテルを出発すると、バスはうねうね続く山道をひた走り、尾根を越えて別の谷に入る。1時間30分ほどで、攀枝^{パンジ}花^{ホア}地区の一面にある「棚田見晴台」に着いた。そこは崖の上にせり出したコンクリート造りのバルコニーである。三方の虚空に柵を巡らし、一方が道路に接している。コンクリートがまだ新しい。俯瞰するとなるほどすごい棚田の規模である。夕日で観るのは、作った人に申し訳ないような気もする。田起こし、田植え、稲刈りなどの農作業はきついであろう。

そういう心を見透かしてか、みやげもの売り子どもたちが、見晴台を本拠地にして待ちかまえていた(大人もいる)。手作りの民芸品を買えとってまとわりつく。小学生ぐらいで、女の子ばかり十数人、民族衣装を着てかわいい。

雲南省南部の山村は、パースと呼ぶ低地に傣族の村落あり、二期作の水田をつくる。同じ地域の稲作可能な南面の山腹には哈尼族が棚田を作る、ここは温度がすこし低いので一期作。彝族は水田を作らず、稲作に適さない山腹を畑を耕作するそうだ。低地の「パース」は、標高が低いので夏は蒸し暑く、快適ではない。こためマラリヤなどの風土病をおそれて、免疫を持つ傣族以外の他民族は住まないそうだ。したがって、棚田を作るのは、哈尼族のみらしい。

子供らは、我々がもう買ってくれないと判ると、自分たちで歌や遊戯を始め、「商店売り子」から「遊ぶわらべ」に変身した。別の棚田を観るため、少し元陽寄りに戻ったと分かれ道からしばらく行った「胜村」の食堂で昼食にした。

昼食の後、横道をさらに進み「愛春」という村を訪れて集落の、のどかな山村風景の中を散歩した。標準的な民家は、日干しレンガ造りで2階建て、屋根は丸太を組み、細長いスレートの瓦を乗せている。1階部分はブタなど家畜を飼っていて、2階が住居になっている。窓は小さく暗く、南国の強烈な日差しを避ける作りである。

村内に湧水を利用したコンクリート造りの共同井戸が数か所あり、野菜を洗ったり、洗濯場となっていた。棚田を眺めるのだから水は豊かだ。放し飼いの犬どもがときおり現れて不機嫌に吠えたが、顔つきよりより気質は軟弱で、積極的に攻撃を仕掛けることはなかった。村の子どもや老人の写真を撮らせてもらって、この村を後にした。

夕方は今日の重要な目的、「棚田の夕陽」を鑑賞して撮影する手はずになっている。ウリさんが前もって決めてある心づもりの場所があり、そこまで車で移動。夕陽を観る有名ポイントの一つなので、入口に観光客相手の茶屋があり、そばに公衆トイレも用意されている。車を止め見晴場所まで少し歩く。

見晴台に着いて広い谷に対峙すると、うろこのような階段状の棚田が、一つずつ青空を写し入れて、谷底に落ち込んでいた。

日没が迫ったが、棚田は期待したような色には焼けなかった。私は、前もって計算したような色に焼けたら、面白くない



日の出の写真を撮っていたらくわえたばこの人物が横切った。

ではないか、と少し思い、今ある景色を楽しんだ。

暗くなってからホテルに戻り、前夜と同じ郷土料理店へ繰り出して大晦日の宴会となった。

▶素足にサンダル、首にてぬぐいで日本人と…

食事が済み、ほろ酔い機嫌でホテルに戻った。ホテルまでは歩いて5分ほどなので、素足にサンダル履き、首に手ぬぐいを巻いて、くつろいでホテルのロビーを歩いているといきなり呼びかけられた。「日本人ですか？」

玄関の方からやってきた一団がいて、そのうちの1人が私に訊いたのだ。そうだと答えると、彼も日本人で、タレントだという。彼は、雲南省の奥地で日本人に会うとは思わなかった旨のことをいった。私は、棚田の撮影で日本人が何人も元陽に来ているのを知っていたので、あまり感激はしなかった。彼に同行していた、中国人の大男は俳優、監督で「姜文」氏、撮影の仕事でここに来ているという。私は、旅番組のタレントだろうと勝手に思いこんでしまい、ほどほどに対応したが、帰国してから調べたら、「姜文」氏は私も観ている大俳優で、張芸謀監督作品などに主演で出演しているではないか。勝手に写真を撮ったりして失礼なことをしてしまったし、もっと丁寧に出演などを訊いておけば「観た観た」と云ってあげられたのにと悔やまれた。同行の日本人タレントは「香川照之」氏で、近作「鬼

が来た！」で両者が結びついたらしい(田井光枝先生説)。「鬼が来た！」はなぜか中国では上映禁止で「姜文」氏も映画出演自粛を告げられた境遇だったそうなので、撮影作を応援てあげればよかった。撮影中の映画は「太陽再次升起(日本名は不明)」という、ぜひ見に行こう。

▶去年と日の出の場所が違う？

次の日は、2006年1月1日となる。「棚田の日の出」写真を撮ることになっていて、ホテルのロビーに朝5時30集合。まだ真っ暗である。さあ出発、と玄関そばにとめてあるバスに近づくと、黒塗りの乗用車がバスの進路を塞いで駐車している。なんだこれは？ どういうこと？。このような場合中国では、ホテルのフロントではなく、門衛の責任範囲だそう。彼を呼んで車をどけるようにせかせかせた。門衛氏はあわてた様子であったが、しばらくしても、車はでんと居座ったままだ。ウリさんに経過を訊いたところ、門衛氏は進路を塞いでいる車の持ち主が誰かは控えず、控えたのは彼の携帯の番号だけで、その番号に掛けたが応答がない。どの部屋に宿泊したかも判らないから呼び出せないそう。仕方なく、バスの隣に駐車している2台のトラック運転手に起きてもらい、このトラックを移動してやっと抜け出せた。無関係なトラックの運転手には、新年早朝から夢を破ってしまい気の毒であった。

思わぬ障碍で30分ほど遅れて出発、棚田を望む日の出鑑賞地点へ向かった。幸い、目的の場所へは日の出前に到着、まだ暗い山腹の道ばたがその場所であった。すでに数台の車が思い思いの間隔で路肩に駐車し、路上には三脚を構えた何人かの影があった。少し風が吹き、寒い。バスの脇が風よけとなって寒さから逃がられるので、数人の男たちが三脚ともども移動してきた。厚かましくも挨拶はない。ゆで卵を売りに来た土地の女性が、子ども連れで手品のように突然現れ、往き来する。1つ1円で皆で買い、食べたところなかなかうまかった。

やがて東の空が白んできたが、空は思うような色合いに焼けなかった。それどころか景色が、夜から朝になっても太陽は山陰から現れない。鳥瞰する棚田群は、あけぼののぼんやりした情景だったが、次第にすべてがくっきりと見わたせるようになった。それでも、山陰から出るはずの太陽を拝むまではかなり間がありそうだった。

ウリさんは首をかしげていった。

「去年は、ここから朝日が昇るのが見えた、今年も日の出の場所が変わったらしい」

雲南省では、太陽の軌跡も一年ごとに変わるのか？

日の出写真はあきらめ、朝食を摂りにホテルに戻った。期待を裏切らない、うまい「米線」にみな喜んだ。朝食が済むとすぐに次の訪問地、「新平」へ向かった。

雲南省南部は、歴史書によるとタイ族の王国が現れたり、元王朝との戦いに明け暮れたりなどなど、秘められた歴史があった。象に乗った軍隊もいたというから、すごい。

▶続く



2006年1月1日なかなか出ない“日の出”を待つ。背後の山は前ページと同じ「白岩子山」。去年と位置が違った？。

注)人民教育出版社(中国)ホームページより

▶先に看板が完成

2006年1月1日、「新平」へと出発。ホテルを出たところでたちまち交通渋滞に巻き込まれる。ホテルの前が私設路線バスのたまり場になっており、小型バスが「客待ち駐車」をして、静脈瘤のように道路を塞いでいた。なかなか通れないと思っていたら、ここでも交通警察官が登場して、流れを取り戻した。警察官のやったことは優先順序を示しただけだが。

再び紅河のほとりに出るため、山道を下る。往路は夜で分からなかったが、陽光のもとで見れば、高度感をたっぷり味わえる路である。元陽の街を過ぎて往路に渡った橋を再び通り、今度は右に曲がって河下へ向かう。本当は、左曲がって往路

を戻った方が「新平」に近いのだが、例の崖崩れの道を迂回するため、「箇旧」経由の遠回り路をとった。紅河沿いの道は標高が低い

ため熱帯性の植物が目立った。「箇旧」は世界第2位の錫の街だそうで(1位はマレーシア)、近代的な広々とした街並みで、活気がある。しかし新しすぎて生活臭に乏しく、行きずりの旅人としてはおもしろくない街だ。ここで昼食になった。あまり欲しくはなかったが、出できたビールをすすめられて飲む。

「箇旧」を後にして「建水」から高速道路となったが、飲んだビールのせいで、尿意を催してきた。じっと我慢し、泰然とした風を装ってパーキングエリアが現れるのを待つ。こういうときの時間経過はのろく、車が高速でも速く感じない。フロントガラス越しに見える景色は、時間が延びてしまい、なかなか近づかない。体をよじってガマン…。

やった! パーキングエリアと、トイレマークの看板がにっこり微笑んでついに現れた。減速して、真新しいできたてのサービスエリアにバスを乗り入れる。目的のトイレはすぐ近くにあり、バスが止まるのももどかしく、急いで駆け込もうとしたのだが、よく見ると、ウソッ! トイレはまだ建設中なのだ。座り込んで作業



中の石工もある。ウリさんが彼らに訊くと、首を振るばかりだ。不条理な現実你放心して、思わず筋肉がゆるむところであった。先にトイレを完成させてから看板を建ててほしい。

「あんたらのオシッコはどうするんだ!」と作業員らに叫びたかったが中国語ではいえない。無情にもバスは扉を閉めて走行路に戻ってしまい、ガマンが継続した。

しかし容量というものがあり、とうとう限界に近づいてきた。路肩に止めてやっしまおう、ウリさんにそう頼んだ。

▶突然のパンク

バスはいきなりがたがたと振動し、続いて右側の路肩に止まった。様子がおかしいとは思ったが、溢れそうな膀胱の処置が

差し迫った問題なので、側溝を跨いで思いを遂げた。一息ついてバスを振り返ると、運転手も降りてきて、おやびっくり、右前輪がパンクしたのだった。バスが止まった第一理由は、客の私の要望ではなく、タイヤのパンクだった。

これ幸いと、他の人もぞろぞろ降りて、それぞれ膀胱をカラにした。ご婦人方もどさくさに乗じて、畑の中へ消えた。

スペアタイヤに替えて、出発したが、このタイヤで走り続けるのは不安があるということで、高速を降りてから、タイヤ屋に寄りってチューブを新品と変えた。中国では、個人営業の職人さんは、業種を問わず仕事が速い。みるみるうちにタイヤ交換を済ませてしまった。

あれやこれやでまたまた、夕暮れとなってしまう、新平のホテルへは暗くなつてから到着した。夕食は、夜街を歩いて庶民的な店で食べた。

新平の街は、滑走路のように広い道路がグリーンベルト付きで一直線に横たわり、その道路に面して公共の建物が隙間を開けて建つ新しい街だった。泊まったホテルもこの道路に面していた。広い敷地をとり、まだ新しい。私から観るとよけいな装飾や無駄なスペースがあるように思えたホテルであった。3階の一角はまだ職人さんが入って、内装中だった。エレベータばかり使っている人には、こういう点は見えない。

明けて1月2日、朝8時にホテルロビーに集合。前夜食べた食堂に、今度はバスで乗り付けて朝食、米線を食べる。ウリさんによると新平の米線は中国各地を旅したウリさんでさえびっくりする安さで、1人前約2元(35円)だそうだ。

▶花腰の村へ

今日の前定は新平から70kmほど東にある花腰^{ダイ}傣族の村「漢沙鎮」へ行く。花腰^{ダイ}傣とは雲南省少数民族の傣族の支族である。約6万人ほどの人が北緯25度以南、新平彝族自治州内の海拔500から1300メートルの低海拔地域に住んでいる。タイ国の場合は泰(タイ)の字を用いるが、民族だとニンベンが付いて傣(ダイ)と表記する。

「花腰^{ダイ}傣」呼び方の由来は、きらびやかな服飾ゆえに周辺他民



花腰^{ダイ}傣族の民家。日干し煉瓦造り、窓は小さい、鉄格子付きだ。



花腰傣族おばさん。右のかぶり物が花腰のもの。左のオバサンの笠と日除け効果の差に注目。

族が彼ら(花腰傣のこと)をそう呼んでるが、彼ら本来の呼び名もあるのだがそれは広まらないで「花腰」が通り名になってしまった。その範囲は、紅河中上流域の傣族全般を指している。この方面の知識はほとんどなく、すべて受け売り情報。「花腰」という名前は今回初めて知ったくらいである。しかし、花腰^{フアンジャールイ}民族というものもある、なんだこれは?。ウリさんに問うたところ、支系の場合、1つの民族として申告しても、少数民族と認められない場合もあり、ひどい場合は強制的にほかの民族に入れられてしまった事例があるそうだ。花腰^{フアンジャールイ}民族もそれに近いらしい。なお、章家瑞という映画監督作品に雲南三部作と呼ばれる作品があり、第2作目「花腰新娘、(日本題：花嫁大旋風、2004年。ひどい題だね)」が、花腰^{フアンジャールイ}民族を題材にしている。1作目の「ルオマは17歳(2003年)」は、棚田を題材、3作目の「芳香之旅(2005年)」は文革時代の雲南僻地で生活する運転手を題材、だそうだ。興味があるが、私はどれも観る機会がなかった。

文革時代、雲南省は格好の「農村地帯」だったので、「農村に学ぶ」ため都市部から多くの青年が送り込まれた。文革が終わっても帰れない人もいて、お気の毒である。帰れた人も学業の中断や時代の変化、文革後に生まれた現役後輩との競争があり、希望する進路に進むためには本人の資質、努力だけでなく、強運も必要だった^注。私のような短期観光旅行者には、過去の残滓は見えないけれど。

新平の小さい街並をでるとすぐ農村風景に変わる。やがて山



着飾った花腰傣族の小姐。紅河の渡し場で

越えの峠路になり、周りは天然林に変わった。冬でも青葉の照葉樹ばかりなので、見た目は九州の低山に似ているが、生え方はもっと密である。けれども大木は無く、ひよろひよろした樹ばかりだ。しかし、それでも天然林は心む。

山道を下り低地になると、再び畑や水田が続く農村風景になった。さらに進んで小さな街「漠沙鎮」に入ってから、右手に曲がり畑の中の狭い路を下った。行く手にパラボラアンテナふうの珍奇な飾りの付いたコンクリートの門が見えてきた。この時は、アンテナを模したような門の意味が分からなかったが、花腰族独特のかぶり物のデザイン化したものと後で分かった。道案内板に「大沐浴村」というのがあったので、大浴場があるのかと思ったが、村の名前でここが目的の村であった。

▶ 殺風景な家と華やかな衣装

村のたたずまいは殺風景だ。傣族という、私は高床式の竹の家を思いうかべるが、ここでは違う。家並みは日干し煉瓦を積み上げた暗い家、路は狭く、家々の窓にはガラスの代わりに監獄のような鉄格子がはまっている。チベット族のように窓枠を飾ったりはしない。華やかな民族衣装をまとっている若い女性が生活している家とは思えない。綺麗な衣装と暗い家との落差が大きい。

村の中を抜けた先に広場があり、ここが観光客の駐車場になっていた。この駐車場は自動車教習所も兼ねていて、「教練車」の看板をつけた、トラックに耕耘機の動力をつけたような車(動力ベルトむき出し)が2台、車庫入れ練習中であつた。

すぐ脇のヤシの木立の中に民族舞踊を演じる円形のステージがあり、そこへ行くと着飾ったお嬢さん方10人ぐらいから歓迎を受けた。前もって取り決めてあつたので民族舞踊(有料)が始まり、これを鑑賞。農作業を体現したような、舞踊が何曲か続いた。中国人観光客数人がいつの間にか現れ、ただで便乗鑑賞された。

花腰族のかぶり物は独特な形をしている。竹で編んだ丸い笊状の笠だが、中心にとがった隆起がある。かぶり方は耳鼻科の先生が使う^{がくたいきょう}額帯鏡をつける要領でおでこに乗せる。ひもをあごではなく、頭の後ろに回して固定する。笠の面積が大きいので日除けの効果は絶大だ。この笠をみやげ用に1つ20円で買い求めた。

踊り鑑賞の後は、数人の踊り子さんと一緒に紅河ほとりまで散歩。観光用に遊歩道が一応整備されていた。着いた川辺は、渡し場になっていて、鉄板製の渡し舟が渡し守とペアで客待ち中だった。体験のため皆で舟に乗り紅河を渡る。船頭さんは、赤く濁った水に舳先を繰り出して上流に向かい、次に舟が水流に押されて下流に流されたと思うまもなく、対岸に着いてしまった。あたりは赤土に埋まった丸石の河原が陽にさらされて広がり、寂しげだった。

村に戻り、昼食を頂く。ここの料理は珍しいものがあり、たとえばタウナギというアナゴの切り身のようなものがでた。名前は知って居る人もいたが、食べるのは初めてといていた。

新平に戻りもう一泊。早起きして、市場を求めて街に出た。いるいる、まだ暗い街角で大勢の農民が野菜などを路上で捌き、店開きの最中だ。自転車などで通う範囲を越えているのか、農民を乗せてきたマイクロバスが数台駐車中。市場で売る農作物をバスを使って運べば、かなりの交通費がかかる。日本でも中国でも農民は苦勞が絶えないと思った。

(終り)

注)劉岸麗:「雲南、赤い大地」,河出書房新社,1999年